目次

第一章　序論

１－１　研究の目的と概要

１－２　研究の方法

第二章　都市・フィレンツェの形成と都市建築

２－１　フィレンツェとメディチ家

２－２　メディチ家の来歴と紋章

２－３　メディチ家による都市建築

第三章　広場と街路の形態

３－１－１　広場

３－１－２　広場の分類

３－１－３　フィレンツェにおける広場

３－２－１　街路

３－２－２　フィレンツェにおける街路

第四章　フィレンツェにおける魅力的空間の形成

４－１　魅力的な都市空間

４－２　ドゥオーモ広場

４－３　シニョーリア広場と第２の広場

４－４　ポンテ・ヴェッキオの隠された通路

第五章　変化あるフィレンツェの広場と歴史

５－１　権力装置としての広場

５－２　メディチ家の最期

第六章　結論

６－１　一連の都市空間とは

参考文献

参考図書

図版写真索引

第一章　序論

１－１　研究の目的と概要

本話題となる「イタリア・フィレンツェ」には、たまたま観光案内図や都市図などを見ている時に出会った。歴史的にも奥深く、都市自体も予想外に複雑である事が分かってきた。そこで、道路の形状や広場などが「何故、幾何学的な形でなく、不定形なものが多いのか」「道路や広場の形は、どのようにして決まったのか」という事に疑問を持ち始め分析することになった。その中でも、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂（ドゥオーモ広場）やヴェッキオ宮殿（シニョーリア広場）ヴェッキオ橋（ウフィツィ宮殿）といった変化ある造形的空間を題料に、一連の都市空間を整理することで、フィレンツェの面白さを追及するのが目的である。

１－２　研究の方法

第一章　序論では、本論の目的と概要について述べている。

第二章　都市・フィレンツェの形成と都市建築では、メディチ家の歴史・文化について及び建築史についてを時代背景を通じおおまかなあら筋を述べている。

第三章　広場と街路の形態では、一般的な広場のあり方と広場・街路の形態を分類し、分析・考察し、フィレンツェの広場を特性の説明を述べている。

第四章　フィレンツェにおける魅力的空間の形成では、どのようにして広場や街路が構成され、市街地の拡張に至ったのかを３つの造形的空間に分類し、それらを分析し成り立ちを明らかにしている。

第五章　変化あるフィレンツェの広場と歴史では、本来の広場と違った機能に着目し、歴史上の事柄を参考に広場の性質について及びメディチ家の絶える血筋について述べている。

第六章　結論では、以上の各章を参考にイタリア・フィレンツェにおける一連の都市空間を２つの主軸に分け比較し、機能の違いについて意見を述べ結論としている。

第二章　都市・フィレンツェの形成と都市建築

２－１　フィレンツェとメディチ家

イタリア・フィレンツェの都市空間を述べていく上で、歴史の概要を整理する必要がある。参考文献（1）によるとフィレンツェは、紀元前５９年ローマの植民都市として拓かれ、「フロレンティア」（花の女神フローラの街）と命名された。街の発展とともにローマ時代の狭い城　壁域は徐々に拡大され、１２世紀後半にはアルノ川南岸も包むまでに延長された。１２世紀には、神聖ローマ帝国皇帝よりコムーネ（自治都市）として認められ、毛織物工業や金融業で１２～１３世紀からヨーロッパ最大の経済力をもつ都市「フィレンツェ」として繁栄し、１５世紀にそれまでの思潮を一新させるルネサンス文化を生む母胎となったのが「メディチ家」である。しかし、フィレンツェ＝メディチ家といったわけではなく、二千年以上あるフィレンツェの歴史の中で、メディチ家による活躍は数百年であり、直接メディチ家が建設にかかわった建物はそれほど多くはないのである。当時メディチ家で権力をもっていた人物 老コジモ（１３８９～１４６４年）やコジモ１世（１５１９～１５７４年）によって建設された建物は、その後のフィレンツェ建築のモデルとなり、現在もその街並みはそれほど変わっていない。そして、フィレンツェの建物にはどこかにメディチ家の足跡が残されており、メディチ家が登場する以前に建設されたヴェッキオ宮殿やドゥオーモなどがその例であり、ヴェッキオ宮殿の内部にはまさにメディチ家の栄華の証やドゥオーモの床にはロレンツォ豪華王の弟ジュリアーノの血が染み込んでいる。このように、フィレンツェにはメディチ家の血脈が絶えた後も権力の象徴が至る所に示されている。つまり、メディチ家はフィレンツェのすべてではないが、メディチ家抜きではフィレンツェの存在や拡張はありえないと言える。やはり、「花の都」フィレンツェはメディチ家の街なのでる。しかし、その裏舞台には、今現在も残っている造形的空間（建物や広場のモニュメントなど）を形成したイタリア・ルネサンスの巨匠たちであるブルネレスキ

やジョットなどといった人物の偉大な活躍があった事を忘れてはならない。

２－２　メディチ家の来歴と紋章

中世都市・フィレンツの造形空間の中には、メディチ家の紋章が現在でも多く残っている。来歴と紋章についての伝説は幾つかある。参考文献（２）によると来歴の伝説とは、メディチ家はフィレンツェの東方、アッペッニーノの山々が連なるムジェッロ渓谷辺りの出身だと言われている。「メディチ」とは、医者という意味でフィレンツェに出てくる以前に、先祖に医術に関わった者がいたという説がある。紋章説は２つあり、メディチ家が権力を握ったあとに作られた伝説であるが伝説としては、こちらの方が有力である。それによると、メディチ家の祖先はシャルルマーニュ（カール大帝）に仕える騎士であり、彼はムジェッロ地方を通ったとき、近隣を震え上がらせていた巨人を退治し、そのとき巨人の矛を受けて楯に何ヵ所のくぼみができ、彼の勇敢な行為を報いるため、シャルルマーニュは楯のくぼみに赤い玉をはめ込んで紋章とすることを許したという騎士説。もう一つの説は、やはりシャルルマーニュが登場するのだが、大帝がムジェッロ地方で重い病気にかかったとき、地元の医者が吸い玉で大量の血を吸い出して治療し、大帝はその医者に「メディチ」という姓を名乗ることと、紋章に吸い玉（他の説では、吸い玉でなく丸薬という説もある）を使うことを許したなどの医師伝説もある。いずれにしても医者に関係する家系であり騎士説は有力といえるだろう。

２－３　メディチ家による都市建築

参考文献（３）によると、この当時のメディチ家は大きく二つの家系に分かれていた。サルヴェストロ・デ・メディチの家系とは別にジョヴァンニ・デ・メディチ（ジョヴァンニ・デ・ビッチ　１３６０～１４２９年）という人物がいる。ジョヴァンニこそが、その後

数世紀にわたってフィレンツェを支配し、メディチ家の基礎を築いたメディチ家「王朝」の創始者である。そして、１３９７年メディチ銀行を創設させ、ローマ教皇庁の財務管理者となりメディチ銀行は２０年でめざましい発展をとげた。その後、フィレンツェ有数の裕福な市民となったジョヴァンニ・デ・ビッチは、公共建築や装飾などにもかかわり、１４０１年に行われたサン・ジョヴァンニ礼拝堂北扉の彫刻制作者（ロレンツォ・ギベルティ制作）を決める審査員の一人に名を連ねており、その他サン・ロレンツォ教会（ブルネッレスキの設計）の改築工事にも多額の出資をしている。　ジョヴァンニが１４２９年にこの世を去ることになるが、彼が残した「財産」と「人望」という二つの遺産を引き継いだ人物は、ジョヴァンニ・デ・ビッチの長男、老コジモ（コジモ・イル・ヴェッキオ）である。彼は、子供の頃からラテン語を学び、当時代表的な人文学者であった。ロベルト・デ・ロッシのもとで古典的な教養を身につけ、銀行の実務に関しても父と同様、ローマで経験を積んだ後、１４２０年よりメディチ銀行の経営を任されることになる。そして、コジモは父をしのぐ経営手腕によってメディチ家をフィレンツェ一の大富豪へと導いた。そして、コジモはその豊富な資金をパトロン（特定の芸術家などを経済面で援助する人）として負担していた様である。その業績が最も目に見える形で残っているが壮麗な建築群である。公共建築を代表する教会でも公的団体によって建てらたものの中で代表となる教会は、市民の生活の一部なのでその団体に寄進され建てられたものが多い。それ以外の裕福な一族であっても教会内に家族の礼拝堂を作るのがせいぜいだった。しかし、コジモのスケールはそれらをはるかに超えていた。フィレンツェ市内だけでも、コジモの資金によって教会、修道院が二つも建造されている。そして、ジョヴァンニ・デ・ビッチの代から始まっていたサン・ロレンツォ教会の改築工事も、コジモがパトロンとなってから工事のスピードが一挙に速まった。その他にも、コジモがお気に入りの建築家ミケロッツォ・ミケロッツィに幾つか設計を頼んだといわれている。その一つが、メディチ・リッカルディ宮殿である。フィレンツェ最初のルネサンス様式の邸館建築とされている。そして、１４６４年にコジモはこの世を去った。その後、コジモ・イル・ヴェッキオに因んだ名をもつコ

ジモ１世は初代トスカーナ大公となり、１７歳で君主として君臨することになる。そして、コジモ１世は領土拡大や軍備増強など、トスカーナ大公国の政治的基盤を盤石のものとした。その他、建築に関する業績も多く残っている。ピッティ宮殿の中庭についても、庭を囲むファサードはコジモ１世の命によりアンマナーティが設計している。アルノルフォ・ディ・カンビオにより政庁舎として１２９８年～１３１４年にかけて建設されたヴェッキオ宮殿（シニョーリア宮殿とも呼ばれ）を後に、ジョルジョ・ヴァザーリを総監督に任命し、内部をメディチ家の栄光を称える壁画で装飾させている。そして、ヴェッキオ宮殿の内部改築と並行して隣にウフィツィ宮殿を建設している。ウフィツィ宮殿は１５５９年にヴァザーリの設計によって建設されており、市内にあるさまざまな役所を一ヵ所に集め、効率的に管理するため作られた建物ある。ウフィツィとは、イタリア語で役所やオフィスの意味を持ち、ウフィツィ宮殿は現在では美術館とされている　コジモ１世は、これらの事業以外にも多くの建築、彫刻、絵画作品のパトロンとなっているが、その大部分は自らの権力を誇示するためのもので、トスカーナ全域におよぶ君主国家に変貌させるという大事業を成し遂げた人物である。

図２　サン・ジョバンニ礼拝堂　図３　ヴェッキオ宮殿　　図４　ウフィツィ宮殿

第三章　広場と街路の形態

３－１－１　広場

西欧都市において、一般的に広場とは都市居住者にとって日常生活に必要で都市生活の中心的存在である。「古代」、「中世」、「近代」の西欧都市において「広場とは一体どのようなものであるのか」ということが疑問になる。そこで、（４）著者 三浦　金作「広場の空間構成　イタリアと日本の比較を通じて」（鹿島出版会）より引用し少し話しておく事にする。日本の国語辞典では、「広場とは」たいてい「広い場所、広庭、ひろっぱ」などと説明されている。少し専門的な『建築大辞典』をみてみると、「広場とは、集会・市場・美観・交通などのために設けられる公共的な空地で、公共建築の前や道路の交差点など都市空間の要所に設けられる」（1）と記されている。これに対してイタリアの建築・都市計画辞典では、「さまざまな機能を有する建築物によって取り囲まれ、自由に出入りのできる空間（場所）」（2）であるとされている。しかし、２カ国の辞書での広場に関する記述にはかなりニュアンスの違いがあることがわかる。それほど、広場という空間に対するイメージや広場の様相・機能，意味もが日本とイタリアでは微妙に違いがあることがうかがえる。ちなみに、西欧で「広場」を意味する言葉を列記してみると、例えばイギリスでは Square（スクェア）、フランスでは Place（プラース）、ドイツでは Platz（プラッツ）、スペインでは Plaza（プラザ）、ポルトガルでは Praça（プラサ）、そしてイタリアでは Piazza（ピアッツァ）となる。これらの言葉は、ラテン語の“Platea（プラテア）“、ギリシャ語の“Platêia（プラテイア）“が元々の語源である。どちらの言葉も、「広い道」をさす言葉であったが、やがて「広い空間」「広場」へと言葉が変わり、１６世紀には英語にも借用されたようである。なお、イタリア語で「広場」という言葉は、「公の場所」あるいは広場に集まった人々、すなわち「民衆」をも意味しているのである。余談が長くなったが、いずれにしても広場とはどこの国も、「公共的で人や物が集まり広い空間」であり、市民の生活には欠かせない場

所であることがここでの結論であり、それらの広場は、幾つかの種類に分類することができ、歴史的・形態的・機能的などの違いに着目してみると、広場の形成過程が明らかになっていくのである。

３－１－２　広場の分類

広場の基本的要件は３点あった。分類すると１.「一定の広がりの空地がある」　２「公共的中心をもつ」　３.「人が集まる」空間という３点である。

そこで西欧広場の歴史･形態および機能について､さらに細かく着目してみることにする。

著者 三浦　金作 「広場の空間構成」 イタリアと日本の比較を通じて（鹿島出版会）によると、次のように分類されている。

芸術的に造形された西欧広場の歴史的展開については、（５）P. ズッカーの名著『都市と

広場』に詳述されている。ここでは西欧広場を以下のように分類した。

（Ⅰ）歴史的分類	（Ⅱ）形態的分類	（Ⅲ）機能的分類
・古代広場	・囲繞型広場（閉鎖的な広場）	・軍事広場
・中世広場	・有軸型広場（建築物のそびえ立っている広場）	・宗教広場
・ルネサンス広場	・有核型広場（核広場）	・市民広場
・17・18 世紀の広場	・連鎖型広場（複数のまとまった広場）	・市場広場
・現代広場	・無定形広場（無定形の広場）	・交通広場
		・生活広場

上記の様に広場といっても、さまざまな「タイプ」があることがわかるであろう。歴史的分類について言うならば、古代広場には政治・軍事・宗教などの集会の場所からしだいに商業的機能の場として単独で変化し、都市の中心として形成される。中世に入ると市場広場、市庁舎や教会の広場など社会的機能を持ち形態的に有軸型広場に属するということ

になる。ルネサンス広場時代になると、広場を囲む建物の統一性より、空間的な統一への意欲からモニュメントの配置などが特徴で、形態的にみて有核型広場と判断できる。しかし、核広場にみられるタイプは不定形な広場の空間構成で、それはモニュメントの視覚効果には限界があるためであり、ルネサンス期の一時期に限られる。広場の大きさも限定されるのがこの時代の風潮である。　17・18 世紀には支配階級の権力の象徴として、広場は閲兵式（軍隊や部隊を検閲すること）（６）、パレード、馬車交通などのための交通広場が特徴で、その効果を高めるため周囲建物のファサードの統一を図っており、どちらかというと、閉鎖的な広場といえるだろう。このように、歴史、形態、機能などが入り混じり独自の広場として形成化が進む。そして、古代・中世・ルネサンスなどの広場が現在にまで残っている。

３－１－３　フィレンツェにおける広場

本論でこれより話題とするフィレンツェも古代よりの都市であり、分析・考察することから「教会、市庁舎、市場」などの広場の前に位置していることが多い。それらは、古代からの歴史や形態によって場所が決まることがある。ただ、フィレンツェにおいて言えることは、古代から何らかの様式をとっており、人や建物などの増加により市街地が変化したと推論する。であるから、フィレンツェの広場は不定形な広場（シニョーリア広場）が多いのではないかと疑問になる。参考文献（７）（８）

３－２－１　街路

　イタリアでは、市街地と田園が結びつきによって発展した街がある。参考文献（９）によると、大都市であるヴェネツッアやジェノヴァ、ピサなどの街もこうした発展をしているらしい。フィレンツェもその一つである。考察した結果まずグリッド状に発展し、その形態より幾度かの拡張により街が放射状に発展している。その際に、広場や建物の造形空間が付け加えられ、現在の街にとどまっていると考えられる。しかし、都市の発展には、

基礎的発展形態が幾つかあり、その都市成長型式と基本的な都市構造を形成する交通軸を（１０） 著者 秋山　政敬 「図説 都市構造」から引用及び図版により、以下で説明する。

都市成長型式について

A　線状型成長

線状型成長は主軸となる交通軸に沿って線状に街が発展していく形であって都市規模が小さい場合である。この都市が拡大発展していく場合には初期の段階であるので新たな発展として正しく誘導しやすい状況にあると思われるので、交通軸による都市形成に従った都市構造を創出するようにする。

B　交差状型成長

交差状型成長は主軸となっていた交通軸に直交するように交差させる交通軸が設定されるのが通例である。この交通軸に従って平均して街の発展が行われるように誘導する。図示においては斜交差に見えるが、これは既存の路線に従ったためで、この場合は将来の発展に際し放射線的交差を考えていくとよい。

C　放射状型成長

放射状型成長は主軸となる交通軸を定め､各地区がバランスよく連結できるように、他の交通軸を放射状になるよう設定する。これによって均衡のとれた発展ができることを期待する。そして、大都市化していくと当然のように環状道路の計画がされることになる。そして一層バランスのとれた発展をすることになる。

D　環状型成長

環状型成長は円形化傾向にあり、中心核を通って交差する道路を含めて全体的に円形状に街が発展していくように誘導する。発展に伴い放射状道路も伸びる形で計画する。これはもちろん、環状放射状型都市として発展していく大都市化の方向にある場合の成長である。大都市のバランスある発展にはこの形式が便利である。

E　格子状型成長

格子状型成長はあたかも細胞が分布しているような地区の分散している場合、これ

らを連結してまとめていかなければならない。したがって隣接都市ごとに格子状の交通軸を形成するように誘導する。格子状となることによって街もまとまった型に構成された構造とすることができる。また、始めから格子状に計画し拡大成長させる。

F　複合状型成長

複合状型成長は市街地の目的別形成をめざして初めから計画されるような都市に構成することを目的として発展させていく場合である。したがって、目的別市街地は分離していてよく、互助的な役割をしながら発展成長していくようにする。このような場合は都市の全体構成を理想化していこうとする成長型式であり、大都市構造でいう多核心による複合構成とはかなり異なるものである。

交通軸について

a　直線軸

都市への始まりとなる最も単純で基本となるのは一本の直線軸(主要道路)である。直線上の２点を結ぶ位置と方向が将来の街のあり方、発展方向にかなり影響することになる。また、軸と離れた位置については点線のように直交する方向に結ばれれば面的発展は整形された方向に誘導されることになる。

b　平行軸

これは直線軸が２本平行していると考えればよい。通常、各軸には主要となる方の位置があり、各軸上には仮想される他の要点をもつようになる。そして各軸の要点をして将来整形に面を構成するように誘導される計画を企てる。かくすることによって格子状の交通軸から成る地区を得ることになる。

c　交差軸

直線軸が交差すると交差点が核化して都市化の要点となり発展していく型式である。これに枝線軸が交わるように発展し､そこが第２の要点となって発展するようになる。そして、各核点を中心に面的な成長をしていくようになる。そして整形に成長をして

いくためには計画的な誘導がされなければならない。

d　格子軸

直線軸に交差点が増加していくと都市として次第に格子状に構成された型式となり、幾つかの要点をもった面的な発展をしていき、成長はさらに拡大していくようになる。これは都市構造形成時の最も基本となる型式であり、街区構成の基本的な単位となる。これは自然発生的な都市であれ、計画的な都市であれ、最も基本的単位となる街区を構成していくものであり、経過的な都市拡大発展をしている期間はこの街区の集合体ともいうべき都市構造の状態にあるものである。

e　放射軸

直交する交差軸の核点を通る斜線交通軸（放射線）が計画され、核点は高度化していき、また、放射線の一定距離点に第の核点を生じ面的な発展をする。この放射軸は一方方向だけではなく、都心を通る幾つかの放射軸が計画され面的な成長と面的な高度化が進むようになる。さらに、都市拡大に伴い、放射軸の延伸充実、増軸が行われて都市の成長が続くことになる。

f　環状軸

放射軸方向に都市の拡大成長が進み、高度化していくと放射軸を結ぶ横断方向の交通軸が必要となる。これが環状線にあたるもので、都市内の均衡のとれた発展に寄与し、一方、都心部の通過交通を減ずる役割もすることになる。また、横方向の各要所を連続して結ぶことになるので効率的な交通の便もはかれる。放射線と環状線の交点は都市の一つの要所として発展していく可能性が大きく、面的開発の拠点となると考えられる。

g　斜線軸

格子状交通軸の核点を結ぶように斜線軸の主要軸が通過している型式のもので、斜線軸との交点が要所としてそれを中心に街区の発展、高度化がされるとともに斜線軸に沿う部分もかなり高度化していくようになる。この型式の場合は斜線軸も最も主要

な交通軸となり、都市の活性化に役立つものといわれている。

ｈ　複合軸

拠点となる要所と要所を分離した型式で幹線交通軸によって結んでおり、拠点ごとに拡大発展化をはかることにしている。拠点間は緑地帯などの緩衝地域を置き、互いの干渉化は避けるようにする。そして第３の拠点を設けて複合軸を形成するようにして都市の構成にあたっては各拠点に違った役割をもたせて特徴づけるようにする。この第３の拠点は例えば住宅団地を計画するなど秩序ある発展を期待できるようにする。

３－２－２　フィレンツェにおける街路

前項の検討にしたがいフィレンツェにおける街路構成について整理する。フィレンツェでは、古代において格子状の街路構成都市が形成され、その核部分を中心に外廓に向う成長により市街地を拡大し、均衡のとれた大都市化がおこなわれたと考察される。都市成長の過程で広場が設けられ、より住みやすい都市空間を求めて市街地を拡大・拡張してきている。この場合、西欧都市における市街地拡張に際い、一連の都市空間の拡大にともなって城壁のつくり替えがおこなわれているため､大都市化していくまでの過程に大きな節（ふし）がいくつも重ねられ、都市空間の変曲点、表情の変り目ができ上がり、それが残されていることが多い。ヨーロッパ都市の個性は、都市ごとに異なる威があるが、そのような違いを生み出す一要因として、城壁のつくり変えがあるように思われる。このような街路構成はヨーロッパ特有のものであり、フィレンツェの街にも共通することに面白さが感じられる。

第六章　フィレンツェにおける魅力的空間の形成

４－１　魅力的な都市空間

フィレンツェの場合、、広場や街路の形はどのように決まったのか。、幾何学的な形でなくて複雑な不定形をとるものが多いのは何故だろう。そういった意味で特に面白い場所だと思う。そこで、魅力的な都市空間として、ドゥオーモ広場からシニョーリア広場・ウフィツィの「コの字型」広場、アルノ川を渡ったピッティ宮殿までの一連の都市空間をとりあげてみたい。

４－２　ドゥオーモ広場

この広場には、「サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂」と「サン・ジョヴァンニ礼拝堂」の２つが堂々と並んでおり、「ジョットの鐘楼」がドゥオーモの南側に寄り添うように建っている。鐘楼は、１３３４年に施工され、外装はピンク・白・濃い緑などの色大理石を用いており、垂直的な直線と伝統的なデザインを持つ建物である。これら、３つが集まるドウオーモ広場は、フィレンツェの中心といっても過言ではない宗教的広場である。

サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂は、フィレンツェ市内より見渡せる巨大な建物で初期ルネサンス建築である。完成時にブルネレスキ設計の大円蓋（クーポラ）が載せられフィレンツェのシンボルとなっており、これを完成せるまで、１５０年の歳月を要したのである。その他のブルネレスキ功績は、１４２０年から１４４６年にかけて、古代建築とロマネスクやゴジックの中世建築の知識と理解とに基づき、さらに透視図法の認識という彼独自の手法を単独で実現させている。（１１）

サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の着工については、参考文献（１２）によると１２９６年で、アルノルフォ・ディ・カンビオやジョット、タレンティらの計画に基づいて聖レパノータ旧大聖堂を取り壊し、約１４０年かけてフィレンツェ共和国が建築し現

在の広場に位置している。装飾性については、ファサードのみならず壁面全体を色大理石のはめ込みでできており、ラテン十字の平面を持つ３廊式の教会である。これは、ローマのサン・ピエトロ大聖堂の最終的な設計と同様でないかと考察できる。サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂が位置している場所は、上記でも述べているが、「聖レパノータ旧大聖堂」という教会の跡地であり、その大聖堂の前に建つ壮麗の八角堂である、サン・ジョヴァンニ礼拝堂の建設は１１世紀後半ではないかと考えられ、ロマネスク様式の建築である。その少し後の時代より、街の人口が次第に増え初め、都市を囲む城壁が築かれたようだ。

都市を囲む城壁は、外敵から身を守るためものであるのだが、同時に都市の住民に対して、街の「輪郭・型式」を教えるためだとも言われている。その城壁の内外側に市街地が形成され、広場や教会が点在するようになる。

そしてここで、「何故ドゥオーモ広場が現在の場所になったのか」を推論してみることにする。参考文献（１３）によると、もともとフィレンツェとは、ローマ時代には格子状型を形成した街であり、これはエトルリア期に創設され紀元前２世紀にローマ領となったのが原型である。そして、ゴート族によって街を破壊されたこともあるがすぐに復興され、紀元１０００年までには再び重要な都市共同体を形成しなおしている。その当時の格子状平面都市は、現在の中心市街地を形づくっており、市街地地図などによって容易に見分けがつく。その格子状市街地内の北東角に、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂は建設されている。何故、この様な角に位置することになったのか、これほど大きなドゥオーモならば街の中心に位置するのが適当であると思われる。それが一般的な考え方というものである。だが、ドゥオーモの立地には、固有の理由がある。

参考文献（１４）によると、著者 ハワード・サルマンは書物「中世都市」の中で、次のように述べる。地域によって例外があるが、古い司教の教会はふつう古代起源の都市に建設されているが、それらは古代都市の縁や、すぐ外側に位置するのが典型的であるという。その理由としては、キリスト教新学を学ぶ者が増え、都市の縁や外側周辺にキリスト教徒

が集中していたためである。よって前述の検討にしたがい、ドゥオーモ広場が現在の場所に位置する理由と推測することができる。後、このドゥオーモ広場ほど大きな広場が、周囲を一周できるまで余裕をとって配置している理由は、参考文献（１５）によると、大広場は教会の側面ファサードをみせる役割をもっているからである。ドゥオーモほどの大きな建築物を配置する際、建物の背景を空間に合わせる必要がある。それほど、広場の眺望に気を使うことが、重要になってくるということである。

４－３　シニョーリア広場と第２の広場

シニョーリア広場は、カルツァイウォーリ通りをドゥオーモ広場から南へ下ったところに位置し、広場に面してヴェッキオ宮殿、ウフィツィ美術館などがある。広場は、１３世紀～１４世紀の中世・ルネサンス期を通じて形成されたものであり、徐々に中心的場所として成長し、市庁舎前の「政治的広場」としての役割をもつことになった。つまり、シニョーリア広場は「市庁舎前広場」であるといえるのだ。参考文献（１６）によると、中世の時代には、フィレンツェ市民の集まる広場でさまざまな議論を交わす空間であり、街全体が美術館といわれるフィレンツェを象徴する広場である。シニョーリア広場は、フィレンツェの名家である建築物に囲まれた広場である。歴史的記念のモニュメントに飾られている。これらの多くの芸術品はメディチ家と深い関係がある。その他、多数の芸術品が並ぶ、彫刻回廊 ロッジア・デッラ・シニョーリアは１４世紀に建てられたゴジック式回廊である。シニョーリア広場とは、何か全体的に野外の美術館を感じさせる芸術的広場であり、政治的広場といった多様な機能をもった広場であるといえる。

つぎに、シニョーリア広場は、何故、この様な不定形な形をとったのかを推論してみる。参考文献（１７）によると、広場がこのように、不定形な形をとる原因は、主としてその歴史的段階的発展の中にあるのであり、こうした変化ある形の広場は実際的な原因によるものだと書物には記載されている。広場の形を定めていく要因にはさまざまあるが、市街地の拡張と既存の運河、でき上がる街路、建物の形に原因があるとされているようだ。

シニョーリア広場において、推論・分析してみると次のようになる。まず、ドゥオーモ広場があった格子状の市街地より、城壁の外側である部分に敷地が求められた。中世期に最初の城壁が改修され、アルノ川手前まで拡張されたのである。その拡張範囲に、現在のシニョーリア広場が囲われたため広場の形状が歪んでいったのである。広場の形の決まり方にはもうひとつの議論が可能である。それは、ドゥオーモ広場からの影響によるものである。参考文献（１８）によると、拡張された市街地にヴェッキオ宮殿（アルノルフォ・ディ・カンビオの設計により、政庁舎として１２９８年～１３１４年にかけて建設され、後にヴァザーリの指導のもとに宮殿としての内部改造が行なわれた)、パラッツオ・オル・サン・ミケーレ、大聖堂の鐘楼、そしてのちにシニョーリア広場に面することになるロッジア・デイ・ランツィといった都市形成の一翼を担った建物が建設された。そして、その少し後､何年も続いた工事によって市内の最も稠密な家並みの一部が取り壊されることで、ドゥオーモとシニョーリアを結ぶ中心街路が計画され、シニョーリア広場が生まれたのである。その中心街路とは、現在のヴィア・カルツァイウォーリであり、当時この街路に面して落ち着いた建築群が立ち並ぶはずであったが、実現されたのは一部であり、前述の建物がそうである。しかし、これほど重要かつ多様な建築群によって囲まれた街路軸は、ここフィレンツェ以外の都市では見出すことはできないと思う。そして、シニョーリア広場から広がる市街地、街路について考察する。

シニョーリア広場から発生している街路は何本もあり、広場がタービン状、放射状といった形に街路が広がっている。これは偶然できたものなのか疑問になる。広場の役割や効果を生み出す要因について述べている（１９）著者 C・ジッテの「広場の造形」より引用すると、次のように述べている。

あらゆる古い広場においては道が、現代の都市計画家が実施しているやり方とは正反対の方法で流れ込んでいるという事実も偶然ではない。ところが今日では広場の各隅に二本の道を通しては、広場への開口部が拡大され、いわゆる「家屋のブロック」もしく

は「建築群」はすべてばらばらに離れ、全体の効果は広場をぶちこわしてしまうとはいわないまでも、非常に変えてしまっている。昔の人の場合はまさしく反対であった。つまり、広場の隅にできれば道を一本に抑え、これに対して垂直な道は広場からみえないように充分の距離をとって最初の道に導入しているのである。そればかりではない。３、４本の道がそれぞれ、広場の一隅に流れ込んでくる場合、これらの道はすべてまったく方角が異なっていたのである。この種の天才的な例は、完全、不完全の度合の違いはあっても、非常に頻繁に、また明瞭に繰り返されているので、古い都市の建設に当って意識的、自然発生的たるとを問わず、守られてきた原則の１つではないかと考えられる。注意深く検討してみると、タービン状に規制配置されたこのような道路方式が、広場のあらゆる地点から広場そのものの外部に対する眺望をただ１つとし、しかも広場を区切っている壁面の開口をもただ１つにするために、どのようにして一番有利な条件をつくり出しているか、容易に納得できるのである。広場の大部分の地点から、一般に分断されていない全体の眺望がえられるのであるが、それは道の出口にある建築がパースペクティヴの力によって互いに一体となり、その無言の助けによって、それがなければ不快感を与えるようなみかけ上の空虚な空間を回避しているからである。　視線の方向に対して、道がこれに平行せず、斜めに入ってくるという事実に、その秘密のすべてがあるのである。これは他の分野、つまり建築家や家具師が木材や石の継ぎ目を隠すとはいわないまでも、少なくともあまり目立たないようにするために、はるかに洗練された方法で中世以来すでに行なってきた技法である。大工のいわゆる継手一覧表なるものをみると、その他の特徴とともに、初歩的でありながらまた適切なこの原則がどのようにして生まれ、利用されてきたかわかるのである。

前述を参考にした結果、広場を考察するとシニョーリア広場の形を決めたのは、初めに述べたようにドゥオーモとの関係によりできたため、多少前文の技法が用いられたとしても、このような原則を認めるのはやや困難であることがうかがえる。それには理由があり、

シニョーリア広場から広がる街路の１つにウフィツィ宮の回廊がある。ウフィツィ宮は１５５９年にヴァザーリの設計によって建設されている。市内にあるさまざまな役所を一ヵ所に集め、効率的に管理するため作られた建物あり、ヴァザーリは初めてコンクリート工法をウフィツィ宮殿で試みている。ウフィツィとは、イタリア語で役所やオフィスの意味を持ち、ウフィツィ宮殿は現在では美術館とされているのだ。そして、シニョーリア広場と隣接するこの回廊は「コに字型」をした空間てあり、第２の広場と推理することができる。書物「広場の造形」を参考にして述べると、この空間は、まったく特殊な効果をつくり出しているようだ。　（２０）著者 C・ジッテは本文でこのようなことを述べている。建築的観点から見て、この第２の広場は世界中で最も注目すべき空間である。ここには、形態や大きさ、隣接する広場、街路の導入の仕方、噴水やモニュメントの配置などに関して昔の都市構成のあらゆるモチーフが綜合されおり、そのおのおのはある程度隠れているため探さないと発見できないのである。だから、この種の美しさに気づかず、ただ印象を受けるだけが多い。この空間には、他のいかなる場所においても見られない芸術的精神が注ぎ込まれている空間だといっている。

一般的に見ると第２の広場は、ウフィツィ宮殿の一部もしくは、街路としか見ることができないかもしれない。しかし、確かな目でみると、この空間こそ「真の広場」といえよう。ここの広場で注目すべき点は、２つの広場のすばらしい結合による一連の大きな空間であり、不形定ではあるが魅惑的なものを作り出していることに、目を見張るものがあり「閉ざされた空間」と表現できないだろうか。

４－４　ポンテ・ヴェッキオの隠された通路

次にフィレンツェで最も多様な機能をもつ橋「ポンテ・ヴェッキオ」についてとりあげてみたい。「ヴェッキオ」とは何なのか。ヴェッキオとは、イタリア語で「古い」という意味をもつのであり、ヴェッキオ宮殿とは関係ないのか疑問になる。（２１）

ポンテ･ヴェッキオは先住民族であるエトルスク人がはじめに架けたのがこの橋であり、

第二次大戦末期ドイツ軍の爆破を免れた唯一の橋である。３つの緩やかなアーチがシンボルで、フィレンツェで最も古い橋という歴史がある。ポンテ・ヴェッキオはアルノ川の最も川幅が狭まい地点に渡されている。現在の橋は１３４５年にネーリ・ディ・フィオラヴァンテによって再建されたものであり、中世頃にあった木造の橋は、１３３３年の大洪水で流され壊れている。１３世紀頃より、ポンテ・ヴェッキオの上に商店が並びだす、そして１５世紀になると橋の両側に肉屋が軒を連ねはじめ、悪臭を放ったという。それを１６世紀の終わり、メディチ家のトスカーナ大公フェルディナンド１世が、すべて店を立ちのかし代わりに貴金属・宝石商といった店に変え、現在のポンテ・ヴェッキオが存在するのである。（２２）

そこで、これまでの市街地発展には、城壁の拡張がここでも影響する。（２３）著者 ホースト・ドラクロワの「城壁にかこまれた都市」を参考に述べることにする。

今までに上げたフィレンツェ南側に位置するウフィツィ宮殿、アルノ川を少し渡る地域までと中心市街地を挟んで反対側の北側メディチ家礼拝堂のあるサン・ロレンツォ教会辺りまでを１１７５年頃にできた２番目の城壁の拡張によって囲まれている。ここまでの街の発展は、古代市街地の城門があったところより街路が伸びて放射状に広がり新たな市街地、道路網が形成されているが、２番目の城壁は明らかに、住居地域が点在している最短コースに沿って作られ、あまり余裕をとらずに計画されている。そのため、また２番目の城壁周辺に住民が定住することになり、１２８４年に２番目を囲む３番目の城壁でき後文より登場するピッティ宮殿を囲む最終城壁が完成され、１９世紀に至るまでフィレンツェを包要するに充分な広さが確保されたのである。これら城壁の形成より市街地が整理され数多くの建築群が建設された。

そこで、前述したポンテ・ヴェッキオの話をする上で、切り離せない密接な関係にある建物が前項で述べたウフィツィ宮殿とこれから話題となるピッティ宮殿である。ここでピッティ宮殿について少し話をとりあげておくことにする。（２４）著者 ピーター・マレーの「イタリア・ルネッサンスの建築」を参考にする。

ピッティ宮殿は、フィレンツェの指折りの大商人である。ルーカ・ピッティが１５世紀半ばにブルネレスキに建設されたという説がる。その後、メディチ家のコジモ１世の妃エレオノーラ・ディ・トレドが買い取りコジモ１世の自宅とした。そしてブルネレスキが没落した後、１５５９年にピッティ宮殿をアンマナーティによって、現在の壮大なファサードをもつ巨大な空間に改築されたのは１７世紀であり、ピッティ宮殿前の広場に張り出した左右の翼は１８世紀の後半になってから増設されたものである。ピッティ宮殿は、外観はシンプルで、高さはそれほどなく横方向にとても長い建物であるがフィレンツェ一大きな建物で今も圧倒する形で残っている重要な建築物である。

しかし、このポンテ・ヴェッキオ、ヴェッキオ宮殿、ウフィツィ宮殿、ピッティ宮殿にはさらなる秘密の空間が存在するのである。それは、ヴェッキオ宮殿、ウフィツィ宮殿とピッティ宮殿を結ぶ高架式の予想外の通路である。その通路は、ポンテ・ヴェッキオの上ににあり、通称「ヴァザーリの回廊」と名付けられている。これは、コジモ１世が、息子のフランチェスコ１世と皇女ジョヴァンナとの結婚式に間に合うよに、わずか五ヶ月という短期間で１５６５年にヴァザーリにより完成されている。（２５）

コジモ１世が、ヴァザーリの回廊を作った理由として、もうひとつの議論が可能である。コジモ１世の仕事場であるヴェッキオ宮殿から自宅であるピッティ宮殿まで市街地を通って帰ることは危険であり、暗殺の恐れがあったコジモ１世は仕事場と自宅の間に専用の回廊を作ったと推論できる。

このような、空間はまれに見ることができなくフィレンツェ特有のものをつくり出していると言え、注目すべき所だと思われる。今現在は、ヴァザーリの回廊、ウフィツィ宮殿共に、メディチ家所有の美術品を核にウフィツィ美術館として世界有数のコレクションが展示されており、世界中にその名を知られている。ウフィツィ美術館は、４５の部屋があり、時代や作家別に展示されており、現在２５００点もの作品が収蔵され、展示室は２階、３階にあり、２階はデッサンと版画の展示室で名画が並ぶのは、３階のギャラリーとなっている。（２６）

ピッティ宮殿も同様に、宮殿に付随するボーボリ庭園にはパラティーナ美術館、近代美術館、銀器博物館、陶磁器博物館、君主の居室、衣装博物館、馬車博物館と計７つに及ぶ美術館、博物館が含まれている。これらフィレンツェの中心施設には、造形的空間や変化ある広場など多くの機能をもつものがあり、施設の多様さについて面白いと感じる。

第七章　変化あるフィレンツェの広場と歴史

５－１　権力装置としての広場

都市を分析していくと街の特徴・器質などあらゆる所が浮き彫りになってくる。また、違った場面をもつ広場をここで紹介したい。（２７）

フィレンツェを代表する最も象徴的なシニョーリア広場は、前項でも述べている様に、中世からルネサンス、近代に至るまでフィレンツェの政治と社会の変化を映し出すほど、歴史ある重要な広場であり、舞台でもある。その様な明るく輝く表情をもつドゥオーモ広場やシニョーリア広場には、また違った機能である権力装置としての陰惨な性格をももっていたのである。ジュリアーノの殺害やサヴォナローラの処刑などは広場が関係しているようである。ここで、その全容を少し述べるため、（２８）著者 中嶋　浩郎「図説 メディチ家 古都フィレンツェと栄光の「王朝」」より参考に述べることにする。

まず､ジュリアーノの殺害についてどのような歴史があったのであろうか｡それは、１４７８年４月２６日に戻ることになる。ドゥオーモでロレンツォと弟ジュリアーノはミサの途中であった。鐘の合図と共に短剣で襲われたのであり、ロレンツォは運良く逃げることができたのだが、弟ジュリアーノは既に息絶えて大聖堂の床に横たわっていた。この殺害を計画したのが、パッツィ家のフランチェスコ・デ・パッツィとパッツィ家に多額の借金を抱えていたベルナルド・バンディーニ・バロンチェッリである。そして、幾つかの出来事をふまえた後、パッツィ本家の老ヤコポは捕まえられ拷問の末、政庁舎（ヴェッキオ宮殿）の窓から吊るされることになる。残りのパッツィ家のメンバーはすべて捕らえられ投獄されており、財産の没収、家門は断絶、紋章もすべて抹消されたようである。しかし、ジュリアーノの殺害に直接手をかけた張本人

ベルナルド・バンディーニ・バロンチェッリは、フィレンツェからの脱出に成功したものの、ロレンツォからの追及を逃れることはできず、絞首刑となった後バルジェッロ宮殿（現在は美術館）の中庭の壁に吊るされたそうである。その姿を、レオナルド・ダ・ヴィンチによってスケッチもされており、ジュリアーノの殺害に加担し、処刑された者は８０人を超えたといわれている。

（２９）次に、サヴォナローラの処刑についての歴史については、当時メディチ家永久追放令が市政府より発しられていたため、メディチ体制下で作られたすべての政府機関が廃止されていた。そのため、フィレンツェは１４３４年以前の共和制に戻ったのである。そしてその後、フィレンツェの政治実権を握ったのはサヴォナローラだった。市民たちの心までも支配したサヴォナローラは、フィレンツェを「聖なる国」にすることをめざして「神権政治」を行なったのである。そのためには、メディチ時代の退廃した風俗文化を「神の法」で浄化する必要があり、「虚飾」は犠牲のかがり火の中で燃やされなければならないとし、「虚飾の焼却」は実際にシニョーリア広場で行なわれたのである。そこで、サヴォナローラは自らを神によって選ばれし者とし、教会の堕落を激しく非難したことで、メディチ支持者がサヴォナローラ支持者へ攻撃をはじめた。サヴォナローラは、まったく権威を失うことになり、反サヴォナローラ派に捕らえられ、老コジモが監禁されたヴェッキオ宮殿の塔にある牢獄アルベルゲッティーノに閉じ込められ、厳しい拷問を受けた末、５月２３日に２人の忠実な弟子と共にシニョーリア広場で絞首刑に処され、遺体はその場で火あぶりにされて灰はアルノ川に捨てられたという歴史がある。そして、シニョーリア広場には、その処刑跡を伝える碑が埋め込まれている。このように広場は時に変化し、処刑の場や暗殺の舞台といった普段とはまた違った表情を見せる事がある。この時ばかりは、広場も権力の装置と成り得るのである。

５－２　メディチ家の最期

フィレンツェからメディチ家どのように絶えたのかを（３０）著者 中嶋　浩郎「図説 メディチ家 古都フィレンツェと栄光の「王朝」」より参考に述べることにする。

前項のポンテ・ヴェッキオの話題にも登場した、フェルディナンド１世の跡を継いだのが、コジモ２世（１５９０～１６２１年）である。彼は病弱であったため、代わって母親の大公妃が力をふるったようである。この時代、政治的な安定は何とか保たれたのだが、一族繁栄のもととなったメディチ銀行が閉鎖されるなど大公国の経済は降下にあったのだ。ガリレオ・ガリレイのパトロンであったコジモ２世は、その恩に感謝してガリレオ・ガリレイより自作の望遠鏡で発見した土星の４つの衛星を「メディチ星」と名づけコジモ２世に献上している。その後コジモ２世は若くしてこの世をさり、息子のフェルディナンド２世（１６１０～１６７０年）が跡を継ぐことになった。フェルディナンド２世は、政治的にも何の業績も残しておらず、トスカーナ大公国は衰退の道を進むことになり、ヨーロッパ片隅の一小国に落ちぶれて行くのであった。フェルディナンド２世とその弟は美術のパトロンとして非常に重要な活動を行なっている。ピッティ宮殿の大増築を施し、現在のパラティーナ美術館の装飾などを行なっている。また、ウフィツィ美術館に展示されている「ウルビーノのヴィーナス」や「教皇ユリウス２世肖像」などの美術品がコレクションになったのは彼らの功績である。その後、コジモ３世（第６代トスカーナ大公）が政権を引き継ぐことになったが、その頃には大公国は瀕死の状態にあり、産業は消滅寸前であった。その頃フィレンツェに訪れたソールズベリ司教ギルバート・バーネットはこのように述べたそうだ。『(図説 メディチ家より引用)「フィレンツェはかつての面影をまったく失ってしまった……トスカーナを旅する人は、かつてはかくも華やかな活動の舞台であった場所が、人気も絶え、今や見捨てられて貧窮のうちにあるのを見れば、驚きを禁じ得ないにちがいない」』コジモ３世は、このようなことを言われたようだ。しかし、そのような事は気にかからず、晩年コジモ３世を悩ましたこと。それは、後継者の問題であった。長男で後継ぎ候補のフェルディナンドは芸術に興味があり、政治にたずさわらずして父よりも先にこの世を去る。そして、次男のジャン・ガストーネ（１６７１～１７３７年）が後にメデ

ィチ家最後のトスカーナ大公となる。２人の息子から世継ぎを得ることが難しいと見たコジモ３世は、メディチ家の血筋が絶えること予測したという。コジモ３世は長女であるアンナ・マリア・ルイーザをかわいがり、王女にふさわしい教育をうけさせ嫁がせていうるが、夫人に先立たれるなど結婚運が悪い余生を過ごすこととなり、子供にも恵まれなかった。そして、１７３７年にジャン・ガストーネが亡くなったとき、トスカーナ大公国はハプスブルク家の皇女 マリア・テレジアの夫、ロレーヌ家のフランツ・シュテファンが相続することで、既に大国間の同意が成立していたそうである。そして、最後のメディチである アンナ・マリア・ルイーザ・デ・メディチは１７４３年 ２月１８日、７５年の生涯を閉じた。彼女の遺骸は、サン・ロレンツォ教会のメディチ家一門の墓に葬られている。ここで、メディチ家の血筋は絶えてしまったが、メディチは今もフィレンツェに建物や歴史といった形で名を残している。生前コジモ１世は、このような事を言っている。「私は、フィレンツェの人々の気質を知っている。我々メディチがこの街から追い出されるまで、５０年はかからないだろう。だが、建物や物は残る。」コジモ１世の言ったように、今現在も建物や物は現存している。そこには、広場・建物・彫刻あらゆる物にメディチ家の足跡が残されている。私はこのように熟思する。「たとえ、メディチ家の血脈は途絶えたとしても、メディチ家の歴史はこれからであり永遠に語り継がれる。」そう信じたい。

第六章　結論

６－１　一連の都市空間とは

前章より分析・調査してきた結果、都市空間の形成には、広場・街路の空間構成や城壁の拡張など、さまざまな観点からプロセスを分析することが重要であり。また、歴史や文化などの発展も同時に考察する必要がある。それら、すべてを整理し、フィレンツェの都市形成の全容を明らかにした事で、一連の都市空間を把握することができたと思われます。イタリア・フィレンツェを本研究で取り上げたことで、広場や宮殿といった個々の存在感や機能性を知ることができた。それら、個々の多様な機能をつなぐことで、市街地全体の

空間に一連の関係性があることが明らかになり、都市として成り立っていると推論された。しかし、研究の結果ドゥオーモ広場、シニョーリア広場・ヴェッキオ宮殿、ウフィツィ宮殿、ポンテ・ヴェッキオ（ヴァザーリの回廊）、ピッティ宮殿といった造形的空間を深く追求していくと、一方向に北から南という様に、カルツァイウォーリ通りに沿って一連の都市空間が形成されていることに気が付いた。本論では、取り上げていないが、カルツァイウォーリ通りの西側に並行している通りがローマ通りであるここには、レプッブリカ広場やメルカート・ヌオーヴォ（新市場）ヴェッキオ橋（ポンテ・ヴェッキオ）といった一連の空間らしいものが存在する。しかし、同類の空間性だが、カルツァイウォーリ通りは、市民や公共的なメインストリートである。それに比べて、ローマ通りは観光や商業的なメインストリートである。同じ橋を渡るのだが、ポンテ・ヴェッキオは、予想外の通路をもち、２つ機能を持ち合わせていることより、全体の一連の都市空間までもがこの様に変化してくる。この様な多様な機能を持つ都市空間は、多くの可能性を秘めている。これらの空間は、フィレンツェ特有のものであって、本研究の最も注目すべき部分である。そこに、研究するきっかけが生まれ、結果として面白い部分だと理解できることが、本論の目的でありそれを実感できたことに喜びを感じている。

参考文献

第二章

（１）図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」８頁
　　ロレンツォ・デ・メディチ　６１頁
（２）図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」３２頁
（３）図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」２８頁～４５頁
　　８８頁～９９頁

第三章

（４）　広場の空間構成　イタリアと日本の比較を通じて　１３頁～１４頁

本文中で引用されている

(1)『建築大辞典』，彰国社，１９７６

(2) Paolo Portoghesi，*Dizionario Enciclopedico di Architettura e Urbanistica,*

Ist .Editoriale Romano，Roma, 1968-69

（５）　「都市と広場」　アゴラからヴィレッジ・グリーンまで

（６）　新修　広辞典　第４版　　１４７頁

（７）　イタリアの路地と広場　上　　２０頁～２８頁

（８）　建築探訪１　ヨーロッパ広場紀行　中世・夢空間への旅　　１４頁～１５頁

（９）　世界の国シリーズ　イタリア　都市の国　７３頁

（１０）図説 都市構造　　３５頁～４０頁

（１１）個人旅行２２　イタリア　２０６頁

（１２）http://isweb10.infoseek.co.jp/diary/kazoo /Italia/Firenze.htmを参考

ブルネレスキ　３頁～５頁

（１３）城壁にかこまれた都市　５１頁

（１４）中世都市　９０頁、９３頁

（１５）広場の造形　５５頁

（１６）個人旅行２２　イタリア　２０７頁

（１７）広場の造形　６５頁

（１８）個人旅行２２　イタリア　２０７頁

図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」９１頁～９４頁

地球の歩き方　４４頁

（１９）広場の造形　４７頁～５０頁

（２０）広場の造形　７６頁

（２１）地球の歩き方　５２頁

（２２）世界の国シリーズ　イタリア　都市の国　１５７頁

（２３）城壁にかこまれた都市　５１頁

（２４）イタリア・ルネッサンスの建築　８６頁～９０頁

（２５）図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」９１頁～９３頁

（２６）http://isweb10.infoseek.co.jp/diary/kazoo_/Italia/Firenze.htm

個人旅行２２　イタリア　２１０頁～２１１頁

地球の歩き方　９０頁～９１頁

（２７）旅の世界史　広場物語　２４頁～２５頁

（２８）図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」５６頁～５８頁

（２９）図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」６９頁～７１頁

（３０）図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」１０８頁～１１３頁

参考図書

図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」　著　中嶋　浩郎、河出書房出版

ヨーロッパの旅　城と城壁都市　著　紅山　幸夫、創元社

広場の空間構成　イタリアと日本の比較を通じて　著　三浦　金作、鹿島出版会

「都市と広場」　アゴラからヴィレッジ・グリーンまで　著　ポール・ズッカー、鹿島出版会

イタリアの路地と広場　上・下　著　竹内　裕二、彰国社

建築探訪１　ヨーロッパ広場紀行　中世・夢空間への旅　著　安藤　直見、丸善株式会社

図説 都市構造　著　秋山　政敬、鹿島出版会

ブルネレスキ　著　ジョヴァンニ・ファネッリ、訳　児島　由枝、東京書籍

城壁にかこまれた都市　著　ホースト・ドラクロワ、訳　渡辺　洋子　井上書院

中世都市　著　ハワード・サールマン、訳　福川　裕一、　井上書院

広場の造形　著　C・ジッテ、訳　大石　敏雄、鹿島出版会

世界の国シリーズ　イタリア　著　樺山紘一、玉村　豊男など

イタリア・ルネッサンスの建築　著　P. マレー、鹿島出版会

旅の世界史　広場物語　凸版印刷

地球の歩き方　凸版印刷

個人旅行２２　イタリア　昭文社

参考図版写真索引

図１　図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」より参照メディチ家紋章

図２　ネット検索より　サン・ジョバンニ礼拝堂

図３　ネット検索より　ヴェッキオ宮殿

図４　ネット検索より　ウフィツィ宮殿

図５　ネット検索より　フィレンツェの街並み

図６　図説　都市構造　ｐ．３６より参照

図７　図説　都市構造　ｐ．３９より参照

図８　城壁にかこまれた都市　ｐ．５９より参照

図９　ネット検索より　ドゥオーモ

図１０　ネット検索より　クーポラ

図１１　ネット検索より　シニョーリア広場

図１２　広場の造形　ｐ．４８より参照

図１３　広場物語　ｐ．２７より参照　ヴェッキオ橋

図１４　ネット検索より　ヴァザーリの回廊

図１５　図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」より参照ｐ．５８

図１６　図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」より参照ｐ．１１５

図１７　図説　メディチ家　古都フィレンツェと栄光の「王朝」より参照ｐ．３２